

「ヒーブの新たなスタート」の年に、特徴活かし実践を重視

日本ヒーブ協議会・梶原織梨江代表理事



日本ヒーブ協議会は昨年、設立四十周年を迎えました。九月に記念シンポジウムを開催し、十年後の生活者・企業・行政の新しい関係、そしてヒーブのアクションを提言した報告書「Design The Future」を発表しました。生活者視点を軸にした生活者・企業・行政の三位一体の関係を大胆に描き、四十周年を単なる通過点やエピソードとして終わらせないために将来へのアクションを起こす契機と位置付けました。

このように日本ヒーブ協議会では、昨年の四十周年を踏まえ、今年を「十年後へ向けた新たな出発の年」「ヒーブ五十周年へのスタートの年」と捉えています。将来を見据えた今の活動の重要性を会員全員で共有していきます。

役」という役割は、今後、生活者・企業・行政の三位一体の関係を生活者視点で構築するという新たな役割を担うものと確信しています。日本ヒーブ協議会は、このような社会的期待に十分応え得る実践的な活動を今後も推進していきたいと思えます。

分科会などの研究活動を通じて、最新の情報や他企業の事例を学び、その成果を発信しています。例えばある分科会では、一人暮らしの若者への情報発信のあり方について検討し、適切な情報提供の方策などを研究、成果を発表しています。このような、自由闊達な参加型の活動がヒーブの実践力となっていきます。

今年度の活動テーマ「次世代へつなぐ、これからのヒーブ」生活者視点と多様性を企業で発揮する」は、将来に挑むヒーブ活動の方向性を象徴するものとして重要です。活動の意義を常に認識し、ヒーブの存在意義を会員同士が共有すること、このことが社会的にヒーブの存在価値を高める機会も増えています。

今年度は構成され、業種・業界の横断的なネットワークを持つ多様性に加え、「生活者視点」と「経営視点」を特徴としています。この特徴は具体的な実践の中でこそ活かされ、ヒーブの「強み」として発揮されてきました。四十年の歴史は、どんな課題にも常に先取的に、柔軟で独創的な対応策を提言してきたOGをはじめ、全ての会員による活動の歴史でもあります。

今年度は構成され、業種・業界の横断的なネットワークを持つ多様性に加え、「生活者視点」と「経営視点」を特徴としています。この特徴は具体的な実践の中でこそ活かされ、ヒーブの「強み」として発揮されてきました。四十年の歴史は、どんな課題にも常に先取的に、柔軟で独創的な対応策を提言してきたOGをはじめ、全ての会員による活動の歴史でもあります。

今年度は構成され、業種・業界の横断的なネットワークを持つ多様性に加え、「生活者視点」と「経営視点」を特徴としています。この特徴は具体的な実践の中でこそ活かされ、ヒーブの「強み」として発揮されてきました。四十年の歴史は、どんな課題にも常に先取的に、柔軟で独創的な対応策を提言してきたOGをはじめ、全ての会員による活動の歴史でもあります。

「生活者」と企業のパイプ

「生活者」と企業のパイプ

ヒーブは、月例研究会や

ヒーブは、月例研究会や

「生活者」と企業のパイプ

「生活者」と企業のパイプ

ヒーブは、月例研究会や

ヒーブは、月例研究会や